

東北大学機械系

同窓会ニュース

第2号

東北大学機械系同窓会
 980-77 仙台市青葉区荒巻字青葉
 東北大学工学部機械・知能系内
 電話 (022) 216-8126
 FAX (022) 216-8180
 郵便振替口座
 番号 02270-8-11176
 名称 東北大学機械系同窓会
 印刷 笹氣出版印刷(株)

阿部博之教授が 総長に就任

西澤潤一前総長の任期満了に伴う総長選挙の結果、阿部博之教授(機34)が選出され、平成八年十一月六日に総長に就任されました。大学が大きく変わる時期でもあり、ご苦労が多いことと存じますが、ご健康とご活躍をお祈り致します。



大学便り 建物の改修と新築 井上 克己(精44)

「何をしているんですか」最近機械系に来られる方が異口同音に質問します。そして、以下に記すような状況を説明すると、「大変で

すね」と同情されます。

機械系一、二号館と講義棟の改修工事が昨年十月から始まりました。三月には終了する予定です。機械系が青葉山に移転して約三十年が経過し、建物の老朽化が目立つようになりました。コンクリートが剝離して落下したこともあります。しばらく前に屋上を中心に補修工事をしたこともありますが、今回のような大規模な工事は初めてのことです。

講義棟は内外装の改修を行っています。このため、十月以降の講義は他学科の講義室や工学部共通講義室を借りて行っており、学生は不便を感じていることと思います。幸い、一部の講義室は正月明けから使用を再開しています。全体の構造は変わりませんが、照明やAV機器への対応など使い勝手が改善されました。

講義室で最も大きい変化は第一講義室下のピロティを間仕切りして事務室を設けたことでしょう。各学科が独自の事務室を持っていた時には必要性を想像することもできませんでしたが、機械・知能系へ再編された今、事務組織の一体運営を行う場所の確保が課題になっていました。

会費納入のお願い

同窓会は、会員皆様が入される会費によって運営されています。同封の振替用紙を使って会費納入をお願い致します。年二千円です。

そこで、この改修を機に、上記の場所に事務室を新たに作ることにしました。少し手狭ですが、教務・庶務・会計の仕事を同一の場所で行える便りを優先させました。もうすぐ新しい事務室で同窓生をお迎えられることを楽しみにしています。

本館の改修は外装が主ですが、暖房をスチームから温水に変更するための配管工事も行われました。窓際の机やロッカー等を移動し、天井の一部をはがしての工事です。建物の外壁を削り亀裂を補修して塗装する工事と合わせて、騒音・粉塵・寒さ・空気のおよび悪さを我慢する状態がもう少し続きます。唯一の救いは、「工事中は部屋の掃除をしても無意味」と自己弁護できることでしょうか。

以上の改修に続いて、平成九年度には旧精密工学科の第二工場付近から東側へ六階建の新棟の建設が始まります。約十五カ月の工期です。完成は平成十年の夏になります。これまでの建物との大きな違いはオーブンスペースというコンセプトにあります。一つのフロアを三研究室で使用し、階段付近にはゼミや打合せに利用できる共通スペースが設けら

れます。また、研究室や実験室などに小さく分割することをせず、一つの大きい部屋として使用することを原則としています。教育・研究についてこれまで以上に活発な意見交換や討論ができると思われます。研究の内容によっては不便かもしれませんが、専門性を重視しつつ幅広い見識を持つ学生の育成には良い環境になると期待されます。

(平成九年一月十五日)

ソウルに住まいして

平山 壽一(精36)

1 はじめに 三年前二十年振りにソウルへ赴任し、その変貌に驚く。高層アパートが林立し、自動車道路にあふれ、路行く人々の表情も自信に満ちている。政治・経済面のすばらしい発展を目の当たりにし感慨ひとしおであった。以下家内との日常生活を通したソウルの印象を述べらる。

2 ハングル 看板から漢字が消えハングル一色となる。バス経路ナンバーや地下鉄駅ナンバーを頼りに乗らざるを得ない。読めぬ地下鉄の乗り換えもできない。家内は一念発起し、二年余りに渡る梨花女大の韓国語コースを履修。一方私も、電子メールをはじめすべての社内情報交換はハングルであり、必要に迫られ、日本人会のコースに通う。ハングルから会話へと歩を進め、直接意見交換をし、お互い理解し合える

ようになり、ウリ(われわれ)への仲間入りもした。最近慶州への旅行、韓国文化講座への参加など、韓国の文物へ直接触れることが可能となり、生活の幅も広がり豊かになる。

(ハングル 一四四六年、世宗大王が創製公布した表音文字。その解例本である訓民正音には、新たに二十八字を作り、人々がたやすく習い日常に使い、不自由しないようにする。とある。)

3 住宅

アパートに入り直ぐ停電、断水、排水不可などの洗礼を受ける。昨年、築三年のアパートへ越し、衛星放送、オンドル(床暖房)の恩恵にもあずかる。国立墓地に隣接した小高い丘にあり、裏山から郭公の鳴き声も聞こえる。ここはソウル市が強力に推進している都市再開発地域であり、高層アパートが多い。丘から下っていくと市場があり、日用品はすべてそろそろ。往復するだけで良い運動となる。ソウルの住宅事情は好転しているものの伝賃金(保証金)の準備は大変。しかし日本に比べ二十五―三十五坪と広く、ゆつたりとしている。汝矣島に始まったアパートの高層化が全国へ波及。今この島には国会議事堂や六十三階のインテリジェントビルもあり、金融の中心街となっている。

4 交通

先月地下鉄五号線が開通。市内の光化門より汝矣島經由金浦国際空港へ乗り換えなしに行ける。一九九八年には八号線まで完成予定。

バスとともに市民の足となる。ソウル市は旧市内から官庁、大学、工場を漢江の南へ移したものの、依然官庁の機能、銀行など残っている。最近POSCOが江南地区へ本社を移転するなど変わりつつある。これに伴い、旧市内はもとより江南も交通渋滞がひどくなる。ソウルの人口は千百万名(全国四千五百万名)、自動車登録台数は二百万台(全国八百五十万台)と過密である。高架道路や外環状道路の建設が進み、交通管制など行っても渋滞の解消には時間がかかる。やはり市民の意識改革しかない。私は旧市内での約束には地下鉄を利用している。

5 食事 プルコギ、カルビグイなど肉料理が有名であるが、ユッケジャンのような唐辛子で味付けしたスープも忘れられない。飲物は真露、鏡月グリーンなどの焼酎が主とはいえず、ビール、ウイスキーの開発競争が激化し、嗜好も変わってきている。最近食事は過消費と問題視されている。テーブルの脚が折れるほど料理を盛り付け、客を持って成すことが礼儀とされたが、ここに来て見直す気運が盛り上がりつつある。食事の廃棄物は日本の倍といわれる。飼料から埋立てなど環境問題にまで発展。健康家の多い現代から、ファーストフードを好む次の世代に替わり、食文化は緩やかに変化を遂げるのかも知れぬ。

6 衣料 市内の古宮では、色艶

やかなチマチョゴリなどの韓服を纏い、婚約者が記念撮影をしている。また梨花女大の近くには道路の両側に数十軒のウエディングドレスメーカが立ち並んでいる。このような華やかな所と東大門市場や梨泰院の実用品のそろうている所とがある。ブランド物から開発途上国の物まで多種多様な物がふんだんにある。繊維業界の低落を見るにつけ、様変わり

7 おわりに 一月十二日付けの朝鮮日報には労働法改正に対するストライキ、慰安婦慰労金の支給、さらに海外投資昨年六十億ドルなどの記事がトップで報じられている。朴正熙大統領から金泳三大統領への二十年を見ても、難しい局面をいろいろな議論を経て、良き結論を導き出してきた。これからの韓国の発展、日韓関係の改善も期待できるものと思う。(韓国冶金(株)勤務)

車椅子の視点で見ると
— オランダの場合 —
高橋 孝一 (精46)

ありや、構内ネットワークに入れない。「おい西さん、昨日は入れたのに、これはどうしたことだい」「エキスパートのペーターを呼ぶよ」なんとペーターは車椅子で現れた。ここは二階である。パソコンをひよいひよいといじり、これでいいかな

と目で問う。昼休みにまた、出会った。ペーターが先を行く。ドアを開け、お盆をとって行く。次々とパンやハム、チーズ等がない。彼もそんなことは気にしないで平然としている。テーブルにつき、仲間と談笑しながら食事を始めた。とにかく、ここオランダでは町中至る所で、車椅子の人に出会う。車椅子の人と健常者と違和感無く溶け合っている。ごく何気ない町の風景となっている。

お年寄りの車椅子も多いのにもかかわらず、どうしてこんなに普通になっているのか、車椅子を取り巻く環境を見てみた。まず商店街であるが、歩道はまず完備している。歩道に面したどの店でも、戸口には段差がない。田舎の店でもそうである。店内の通路は、車椅子が十分に通れ、かつすれ違える。レジでの精算ももちろん、車椅子のままできる。店内も段差はないところが多いが、段差があるところでは緩やかな坂か、パリのオルセー美術館のように、ほんの二、三段の段差でも簡易リフトが付いている。

しかし、商品陳列棚は、車椅子で座ったまま取れるところばかりではない。この時は、周りの人に手伝ってもらっているようである。余計なことだが、北海道並に寒い国なのに、戸口に段差が無くて、ど

うして寒気を防いでいるのか気になった。通常戸の下部にゴムの板がついている。そして入り口はかすかに坂になっており、戸を閉めるとゴムが坂の高いところに当たり、きちんと風を防ぐようになっていく。

オランダでは、特に自転車や原付車専用の道路があり、車を気にせず車椅子で通行している。これでは車も自転車もスムーズに走れ、かつ事故も少ない。うらやましい限りである。駅等の公共建物には、もちろん入口ツクされてないエレベーターがある。公共交通機関の列車には、車椅子用の空間が、確保されている。しかし、欧州では乗り場の高さが地面とほぼ同じであるので、列車の入り口との段差がかなりある。客車のドアが開くと小型の飛行機のように、ステップが降りてくるほどである。

乗車二日前に連絡する必要があるが、どの列車にも乗れる。また障害者と一緒の人は電車がたただである。車掌が車椅子の人を乗せてくれる。この点に関しては、列車の入り口とプラットフォームとの差が無いぶん、日本の方が改造しやすいと思われる。しかし、バスには乗れない。が、ワゴン車タイプで、車椅子のまま乗降できるタクシーがある。これはどの町にもあり、良く利用されているようだ。

このように設備が整っているためか、土曜日の繁華街では、必ず、車椅子の人に出会う。中にはボランティアに押しもたついている人もいるが、圧倒的に一人で動いている人が多い。中でも電動の車椅子が多い。町から離れたところからでも電動車で買い物にきている。とにかくごく普通に振る舞っているし、周りの人も当たり前と思っている。

ただし、不満もある。古い店や小さい店はいかない。アムステルダムやユトレヒトなどの、オールドタウンに行くと、やはり道が狭かったり、段差があつたりして出掛けにくい。スポーツでは、プールは利用しにくい物の一つである。特にプールに入るのが難しく、人に頼らなければならぬ。これがいやで行きにくいと言っている。しかし、テニスは頻りに利用されている。

又駐車場も悩みの一つである。車椅子の場合は、家用車のドアをいっばいに開けないと、車椅子に乗り移れない。ところが身障者用の駐車場は必ずあるが、広さが足りないのだ。いつも端を使用するが、いつも空いてばかりはいない。ひるがえって日本の場合はどうだろうか。もしお店に入らうものなら、戸口に入るところから、人が出てきて車椅子を人ごと運んであげる。美しい光景であるが、何か違う。つまり、お店にとっては、これは日常で

はないのである。しかし車椅子の人たちにとっては、これは日常なのだ。我々日本人は人に迷惑をかけるのをきらう。特に日常その必要性を感じている人は、なおさらであろう。だからこそ、健常者と同様に、さりげなく行動できる必要があると考え

る。障害者ももちろん一人で考え、行動できる。しかし、健常者に比べ、身体の動きが制約されている。そのところだけを設備等で補えば、後は彼らで十分にやっていけるのである。彼らの介添えをする等の日常での親切ではなく、彼らの行動を妨げる障害を取り除くことに、意を注ぐべきだと考える。

そのときには、車椅子の方の視点に立って考えて頂きたい。すると、いかに世の中が違って見えることが、気がつかれると思う。

私事で申し訳ないが、子供がはいがができるようになったときに、家具の角等が妙に気になり、畳の上約三十cm位に視点を据えて周りを見渡してみた。すると、あるわあるわぎよつとするような家具の角が目の高さに沢山あった。そこら辺において箱など角だけである。ちよつと視点を交えるだけでも、物が違って見える。

車が高速で走っている脇の草原の中の道を電動椅子でのごんびり走っているところを見てみると、その人の状態はともあれ、オランダ社会の

余裕を見る思いがして、個人の尊厳と自立を大切にしている国ならではのと思う。日本だつてやれるはずである。(Fuji Photo Film B.V. 勤務)

ペナンにて

森田 重敏 (精修50)

今朝起きてTVニュースで、神田正輝、松田聖子の離婚報道が流れて来た。一九九三年の六月に会社よりペナン工場赴任を命ぜられ、今日現在も、家族共々南国のペナン島ジョーシタウナ市に滞在している。この間テレビとはほぼ無縁ともいえる生活で、もしつけたとしても、マレー語、中国語、英語の番組を眺めるだけです。今日はたまたま、日本出張でホテルにいたので、冒頭のあまり楽しくもないニュースに遭遇してしまつたわけだ。普段は、シンガポールまたはバンコクで印刷された新聞を一日遅れで読むことが、日本の情報に接する唯一の機会です。従つてこのようなニュースも新鮮といえはいえなくもないが、三年前と比べて日本はどう変わったのだろうかと思ひ考へ込まざるを得ないことでもありました。

私の滞在しているペナン島は、マレー半島西側、タイ国境に近い位置にあり「東洋の真珠」と言われ、観光の島でした。現在も、もちろん観光も重要な産業ですが、同時に島側と橋で接続された半島側にも、大規模な工業団地群を擁する開発の進ん

だ地域となつていきます。私の勤務する工場も、半島側のプライ工業団地の中のフリートレードゾーン(自由貿易区)にあり、隣接地には、ソニー、東レ等数多くの日系企業がたたくさん進出しています。日系以外にも、インテル、シーゲイト、ポッシュ、エイサー等、各国より軒を連ねて進出しています。

ペナン州の州知事コー・ツー・クン氏は、ペナン島をコンピュータイランドにするとの言葉をよく使うほどです。マハティール首相の指揮のもと、二〇二〇年には、マレーシアを先進国とするの目標を掲げ、国政運営されていますが、その意気込みと熱気を十分感じることが出来ます。

私の仕事は、マレー系を中心に、インド系、中国系の従業員と一緒に、ハードディスクドライブ用の磁気ヘッドを製造、出荷を管理することです。さらに、日本の親工場より製品移管を進めることも重要な仕事です。この業務をこなしていくために、日本にいた時には考えられない権限を頂き、顧客との交渉、親工場との連絡、工場従業員への指示等のコミュニケーションを、楽しみながら、かつ苦しみながらなんとかやっています。

今回が初めての海外勤務で、赴任以前は、心配の種が尽きなかったことを今でも思い出します。

ボーダレス社会到来の言葉は、当

時、新聞雑誌にいつでも載つていたように思います。当地に来て、当社顧客の米系企業の幹部、エンジニアと話す機会が多く、夜には日本流の接待等で親しくなることができました。これらの多くの人達の動きを見ていると、日本で勤務している時には分かつてはつもりであっただけのことを、迫力ある実感として体得できたと思います。特に思うことは

米系企業のバイタリティーです。一つの例として遭遇した事件は、私共の顧客企業が他社へ買収されたこと、これに関連した二件の例を目的当たりに致しました。二つ目としては、当社と同時期にペナンで操業を始めた顧客企業が、今日現在すでに中国に工場を持ちインドにも調査の手を広げたことで、その展開力の速さにはあきれるばかりでした。もちろん企業風土の差、言葉の壁等エクスキューズすることはいくらでも上げることが出来ます。しかし、私の所属している会社も含め、ボーダレス社会で生き残っていくためには、大きな構造改革を要求されていることを体感できる所で仕事ができることに、喜びと責任を感じています。

同窓会編集幹事より堅苦しいものではなくと依頼を受け、無い頭をふり絞って書いたもので、脈絡も内容も無いものになったかも知れませんが、ことをお許し下さい。

(HITACHI METALS

ELECTRONICS勤務)

同期会ニュース 五色会の歩み

(機械二十九年卒の会)

五色会、青葉山の登り口、現在の博物館の近くの森の中にある五色沼から会の名を命名した。だれの発案か定かではないが、東京地区でのコンパの時だつたと思う。卒業して十五年もたった頃は、各人エンジニアとして一人前となり、精神的にも公私ともに落ち着いてきた時期、大体この頃から同級会が始まるのが世の通例です。五色会もこの頃、スタートした。珍しいのは、その後年一回途切れなく続いているのである。しかも毎年末(十二月八日前後の午後六時から八時半まで)、いつもの所(東京駅八重洲口、駅より一分、ホテル国際観光)で、いつものように開くのが恒例行事になっているのです。新



幹線（東海道、東北）のお陰で、仙台も名古屋も参加範囲内、この外に名古屋以西の人はやはり彦根あたりで集まっているし、卒業生全員コンパは懐かしの仙台で、三年に一回実施しているのです。皆そろそろ現役引退、いろいろな道歩んでいます。それでも仲間との屈託のない話で、ひと時を過ごすのを楽しみにしているのです。今年はどうするか、秘策でも練らねばと思います。

（千葉重郎（機29））

機械三十一年卒同期会 四十年目に開催

「四十年目に開催」とは、いままでも何をしていたのかと言われそうで、あまり胸を張れない見出しのように思います。しかし、とにかく開催してよかった、というのが発起人一同の（そして、恐らく出席者全員の）気持ちです。

私たちの在学中はまだ世の中の景気は悪く、就職戦線も厳しいものがありました。ただ、貧しかったけれども、私たちは戦後の日本の復興の息吹を感じながら、おおらかに学生生活を楽しんでいたように思います。しかし、私たちが卒業する年は前年と様変わりの好況に恵まれて、全員残らず産業界に就職しました。その後歩みは日本の高度成長期と軌を一にすることとなります。

同期会を持つという声は何度か掛けられたこともあるのですが、皆

の職場が全国に散らばっていたこともあって実現しませんでした。ところが、多くの人が定年などで第二の人生を迎えようとするその時期、平成七年の十一月に、機械系同窓会の設立総会があったわけです。そこに集まった同期の五人の中から是非同期の集まりを開こうとの声が出て、何の異論があろうはずもなく、昨平成八年三月十五日の夕べ、神田学生会館で開会の運びとなりました。機械系同窓会設立に感謝！です。

春雨の降る肌寒い日で、幹事役の二人はこれから集まる二十八名の顔が果たして分かるだろうか、机の上に名札を並べて心細げに待ち受けた



ものです。

名札をとり上げたときに初めて誰かが分かって、やあしばらくと声がかかる人もあれば、姿を見ただけですぐに分かって名前を呼び交わす人も——。長い歳月はそれぞれの容貌を多かれ少なかれ変化させていて、初めのうちは互いに遠慮がちにいましたが、一人一人近況報告をするうちに、卒業当時の面影が二重写しとなってよみがえり、たちまちのうちに打ち解けて、母校の製図室に戻ったような会話が飛び交いました。そして、あつというまに三時間余りが過ぎ去りました。四十年という月日がかえって感動を深いものにしたのかも知れません。

何よりも嬉しかったことは、高度成長の担い手として重責を果たした自負を秘めながらも、それを感じさせない優しさ、やわらかさが皆を包んでいたことです。ただ、一つ残念なことは、出席者の一人がその後病没されたことです。皆との再会が心の慰めになったことを祈るばかりです。次回は今年五月に仙台で開催しよう、仙台在住の方に世話役をお願いしています。

（西尾宣明（機31））

精密四十一年卒同期会

精密工学科を昭和四十一年（一九六六年）に卒業した我々のクラス会を紹介させて頂く。幹事が怠けていたため、最初のクラス会は卒業後十

八年の一九八四年であり、平均年齢は四十歳であった。四十は正に働き盛り、会は大いに盛り上がり、久々に会った面々と色々な話題に花が咲いた。あのころはまた実働部隊から管理職に変わったところであり、仕事上その人の持つている人脈が重要な要素となることから、今後は毎年クラス会を開いて欲しいとの意見が強く出された。

しかしながらまたまた怠け者幹事のため、二回目のクラス会が開かれたのはその五年後であった。その後約五年ごとのペースで開催され、最も最近では昨年二月に箱根の強羅で泊まり込みで開催された。会場の都合で金曜日の開催となったため、出席は十四名であったが、温泉とおいしい食事に話はずんだ（写真）。乙なことに当夜は雪、翌日の朝には雪



の箱根の景観を味わうことができた。ただし、チェーンを持たずに車で来た人にとつては災難であり、何人かは後日取りに来ることにし、電車で帰宅を余儀なくされた。

今回のクラス会では平均年齢が五十二歳、いわゆるリストラを経験した後でもあり、話題も十二年前のものとは全く違っていた。五年ごとのクラス会は、時代の色の変遷と時の流れを実に鮮明に見せてくれた。五年ごとのクラス会も味はあるが、今後はできたら毎年開催を目標とすることになった。また、次のクラス会は仙台で開催することを決め散会した。（清水優史（精41））

精密四十二年卒同期会

我々昭和四十二年精密卒の同期会は、前回（平成五年五月）から三年ぶりに八年七月六日（土）開かれしました。場所は品川のパシフィックホテル。仙台、岡山、愛知、静岡など遠方からも駆け付けてくれ、在籍四十九名の中で、十九名の懐かしい顔が勢ぞろいしました。出席したのは、赤髭、新居、池谷、伊藤、井上、大島、大和田、小川、片岡、鈴木（昂）、鈴木（善雄）、千把、高津、中川、芳賀、福田、前野、松井及び森の諸君でした。

学生時代の思い出や仕事のことなどで話は尽きず、予定の二時間はあつという間に終了し、二次会、三次会へと流れていきました。次回は、



同期生よ頑張れ 機械II四十二年卒同期会

我々が大転換時期を迎える五十五歳前後（三年後）の七夕のころを予定しています。今回以上の参加を期待しています。なお、今回は夫婦連れで、一泊旅行（仙台）の案も出ていますので、幹事は参考にしたいと考えております。

（福田紀之（精42））

昭和四十三年の卒業生は川内から本部に移るとき、青葉山にて学んだ初めのころであったように記憶しております。当時青葉山は工学部移設の最中であり、アクセスが悪く片平↑青葉山のスクールバスか、川内から徒歩にて通学するのが常道でし

た。徒歩の場合、特に雪の日は最悪で、急勾配の坂を登り降りするのが大変つらく、滑りながら悪戦苦闘、その結果靴は汚れ、片平に行くところから降りて来たことが一目瞭然で、少々恥ずかしい思いをしました。今は足腰がガタガタですが、当時は強靱であったに違いありません。

卒業してからは、大学に残る者、企業に就職する者と散り散りになってしまいましたが、十年程度経過すると心の余裕ができ、同窓生の安否を気遣うことができるようになりました。そこで在京の企業に就職した四く五人のメンバーが集まり、同期会の企画を行いました。

実現したのは今から十五年前とされています（間違っていたらご免下さい）。写真はそのときのもので、場所は東京の銀座であったと記憶しております。当時三菱重工の石丸さんが中心となり、大変苦労してまとめて下さいました。

集合したときは良く見ると、まだ学生時代の面影が外見はかなり変化しており、見分けが付かない人もおりました。特に髪型に関しては個人差が激しく、現在では更に差が広がっていることと推測します。色々なストレスが原因でしょう。また寂しい話ですが、同期生の中に亡くなっている方もおります。会では一人一人仕事や家族の報告をし、己の年も時間も忘れて学生時代の思い出話に花を咲かせました。

このときは毎年集まろうと意志統一をし、更には年賀状でも今年は集まろうと書いてはいるのですが、仕事等に忙しくなかなか会う機会が無く、二回目は二年前、神奈川県奥湯河原温泉の「山翠楼」という立派な旅館で実現しました。このときも石丸さんのご苦労がありました。元気で活躍している姿を見てお互い安心しましたが、ここでの話題はもっぱら会社の将来のこと、工業国日本の空洞化のことであり、皆危惧の念を抱いていることが分かりました。



また機械系学生の将来を心配する声も強く、我々の責任も重いことを再確認致しました。

その後の連絡で社内の移動や関連会社への出向で、皆それなりに出世

をし喜ばしい限りです。一方世の中が情報化時代、環境保護時代となり、頭の切り換えや勉強することが多く、大変な時代となりましたが、我々中間管理職が時代の先陣を切り、後輩のためにも頑張らなくてはならないと思います。

（永井 弘（機II43））

精密四十四年卒

有志の会願末記

去る十一月十六、七日に精密工科学科S四十四年卒有志の会を開いた。突然降ってわいた話であり、準備不足もあつてか、参加者は五名であつた。

そもそもこの有志の会開催のトリガーは、参加者の大古田君と安達君とのひよんな切っ掛けによるものであつた。大古田君は郷里の沼津で会社を経営しており、安達君は奥様が三島のご出身である関係で、二人は時々顔を合わせていた。七月、二人の話が弾み、「大学卒業以来既に二十五年以上が経った。この辺で一回位同級生で集まってはどうか」となった。場所は「日本の中間」というところ

で伊豆長岡にした。それから、連絡の取れる同級生十数名に呼び掛け、返事を待った。小生も早速駆け

つけることにした。

当日はお天気も良く、三島で新幹線から伊豆箱根鉄道に乗り換え、伊豆長岡で下車した。狩野川を渡ると、目指す古奈温泉「住吉館」が見えた。河畔の閑静なたたずまいである。小生が着いた時には、既に大古田君と安達君が来ており、間もなく綱淵君と佐藤（謙）君が来た。あいにくと、日本国際工作機械見本市の会期中であつたりしたためか、参加者が予想したより集まらなかつた。

お互いにひと目見た時に、直ぐ昔の顔を思い出し、二十数年ぶりに会ったとは思えないから不思議だ。これは、「杜の都仙台」で最も多感な青春時代の二年間、苦業を共にした仲間だけが持っている特権であろうか。ビジネスだとうちはいかにない。「一月前、いや一週間前に会った人の名前と顔とが一致しなくて困っている」などとはやいているのが嘘のようだ。早速、五人とも浴衣に着替え、離れにある大浴場で遠来の汗を流した。湯上がりにはまずビールで乾杯し、お互いの久闊を叙し、健康でこうして再び会えたことを喜び合った。

六時からささやかながら宴会が始まった。誰から言い出したか忘れたが、「今夜は、大学時代の成績のことだけは話題にしない」との協定ができた。まず最初に、同級生で既に物故された加藤君や木曾君のご冥福を、また、恩師であつた棚澤先生、佐藤先生、戸部先生のご冥福をお祈りし

会員の訃報 (敬称略)

ご逝去を悼み、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(設立総会以後、事務局で入手したものと、青葉工業会報40号87頁の訃報を合わせて掲載しました。)

正村 基三 (機3)	5・4・16
浅野 悌次 (機5)	8・2・19
森 義郎 (機8)	6・12
伊沢 良三 (機9)	6・9・2
仙川 敏雄 (機16)	8・3・14
神門 和夫 (機16・12)	8・5・10
鈴木 哲夫 (機17)	7・12・10
富田 耕造 (機18)	8・1・21
森田 浩三 (機18)	7・12・2
渥美 光 (機19)	8・10・9
堀米 幸吉 (機19)	8・4・3
伊藤 浩 (機21)	8・3・8
大野 芳夫 (機22)	8・1・9
吉田 条二 (機22)	8・7・30
木村 英二 (機23)	6・7・24
伊藤 卓夫 (機32)	4・8・11
伊達 和博 (機47)	8・2・25
中切 俊行 (機博49)	7・12・13
岡野 武治 (航19)	9・1・13
細野 晃 (精31)	8・5・25

お願い 会員死亡の時、氏名字科名・年次・死亡日・住所をご連絡下さい。会長名の弔電を差し上げます。

- ・旧精密系以外 東北大学工学部 機械系太田教授 022-216-8126
- ・旧精密系 齋藤馨 03-3930-8870
- 又は大池弘一 0427-91-5021

た。夜も更けるにつれ、飲物はビールから銘酒「菊源氏」に移り、ピッチがますます上がって来た。話はさらに弾んで、一番町や青葉山、特に工明会の運動会で東一番町を仮装して



練り歩いたことなど、今では貴重な思い出となった。写真は、宴もたけなわ時に撮ったもので(前列右から網淵・大古田、一人おいて佐藤(謙)、後列右から安達・飛田の諸君)、笑顔の似合うお嬢さんは当地のコンパニオンである。彼女達(実は二人いた)の方がパソコンやワインドウズなどは、われわれオジサンよりもはるかに詳しいのには参った。

コンパニオンが引き揚げてからは、仕事や家族の話になった。各人の子供達は、上は大学生から下は小学生までおり、これからまだまだ第一線で頑張らねばならぬようだ。明るる日には、大古田君の愛車で三島界隈の名所旧跡巡りをした。幕

末の溶鉱炉で産業遺産でもある「葦山反射炉」、富士山の雪解け水がわき出る神秘的な「湧水源」、頼朝出陣の「三嶋大社」、やすらぎと想いのメモリアルパーク「沼津御用邸記念公園」など半日かけて回った。最後は沼津で、富士山を仰ぎグラスを傾けつつの遅い昼食となった。

参加者は少なかつたが、実り多い会であった。次回を、今世紀中に仙台で開くことを勝手に決めてしまった。在仙もしくは近隣の皆さんに、この紙面を借りて音頭取りをお願い致します。(飛田道雄(精44))

機械六十二年卒同期会

私たち(機械工学科一九八六年卒)は、卒業した翌年から一部のスキー好きが中心となって、一年に一回スキー旅行を実施してきました。はじめのうちは十五名程度がお互いに電話や手紙のやりとりで計画を立てていきましたが、いつの頃からか幹事が名簿を編集し組織的に運営するようになりしました。皆それぞれ多忙ですので、全員が毎回出席というわけにはいきませんが、入れ替わり立ち替わり新たな参加者が増え、気がつく

と名簿に登録されているメンバーも四十名以上になっていました。この旅行以外に多くの参加者を集める同窓会活動がありませんでしたので、卒業後十年経ったのを機に、この集まりを正式に機械工学科同期会とすることにし、スキーマの好き嫌いに

かわらず、消息のわかつている同期全員をメンバーにすることにしました。

このようなことを話し合った一昨年のスキー旅行において、「十周年は是非仙台で」、「国分町で飲みたい」という声が多数出ていましたので、十周年目の同期会は国分町通りに面したホテルリッチで、昨年一月二十七日・二十八日に開催しました。多くのメンバーに声をかけたものの皆職場の都合等でキャンセルが相次ぎ、最終的な出席者は例年と同程度の十四名でした。しかし今まで参加していなかったメンバーも加わり、例年以上の盛り上がりを見せました。一次会はホテルリッチ地下の炉端焼きでスタートし、途中ラーメン屋を挟むなどして国分町内を飲み歩きしました。宿泊場所をホテルリッチとしたのは「時間を気にせず徹底的に飲みたい」という皆の強い意気込みからでしたが、最後までがんばった参加者ですら、二時にはおとなしく戻ってきたようです。学生の頃は明け方まで飲んでいた猛者たちも、少しは年を取ったということでしょうか。

翌日はホテルをチェックアウトした後、参加者ほぼ全員で青葉山の機械系を訪ねました。青葉山では自然に出身研究室ごとに分かれて各々懐かしい場所を見て歩きました。日曜日の午前中でしたので人影も少なかったですが、阿部先生だけはお見えになっており、阿部研出身者は久しぶりに恩師とお話してきたとのことです。

このようにして旧交を温め合った我々でしたが、昼前には青葉山を下り、仙台市内で懐かしい牛タンのに舌つづみを打ったのち仙台駅で散会しました。なお今年度の同期会は一月十八・十九日に塩原温泉で行う予定です。出席者多数となることを期待しております。

(久保 良(機61))

事務局より

◎八年度通常総会を五月三十一日(土)仙台市宮城第一ホテルにて開催します。松下電器産業(株)副社長 杉山一彦氏(機35)の特別講演があります。欠席の場合は同封ハガキで近況をお知らせ下さい。

◎同級会(同期会)を開いた時、原稿(八百〜千字)、写真一葉を是非送って下さい。送り先は同窓会事務局。受付随時。原稿在中と朱書のこと。同窓会ニュースに掲載します。

◎住所変更の場合、必ず同窓会事務局までご連絡下さい。同時に旧住所の最寄りの郵便局で、新住所あて回送手続きをとって下さい。

◎海外に駐在される方は、駐在先の住所をご連絡下さい。帰国後は直ちに現住所をお知らせ下さい。

◎おわび 新体制未整備のため海外駐在会員の随筆が精密卒の方だけに なりました。次号より改善します。